

ヤンゴン素描 3. カラウエイ 迦陵頻伽と ヒンダーミン 鷺王

山形洋一



ミャンマービールのラベルでお馴染みの鳳凰のような形の船は、王の御座船で、カラウエイ・パウンと呼ばれている。ヤンゴン市内のカンドー湖には同じ形をした Karaweit Palace という名のレストランがある（図参照）。

『緬漢詞典』でカラウエイを引くと、「パーリー語經典に出てくる鳥の一種で、迦羅頻伽鳥、別名妙声鳥」とある。インド人の空想が生んだ鳥の一種で、サンスクリットで kalavinka。ヒマラヤ山や極楽浄土に棲むとされ、日本では「かりようびんが迦陵頻伽」の名で親しまれ、舞楽「迦陵頻」では童子が鳥の翼をつけて可憐に舞うそうだ。

迦陵頻伽とよく似た鳥の像が、ヤンゴン市循環線チーミンダイン駅のすぐ南西、寺院建築用の飾りを作る金工の店の前に、仏塔の上にかぶせる大型の傘蓋（ティー、Htee）と並んで燦然と輝いている。

「これはカラウエイだよね」

私は工房を覗きこんで、知ったかぶりをしてみせた。返ってきた答えは、

「いえいえ、カラウエイではありません。ヒンダーです」

なるほどサンスクリットのハンサ Hamsa が訛って、ヒンダー Hindha となったのか¹。

ハンサは、天地世界創造の神ブラフマー（梵天）をのせて天上を駆け、水中にも潜る聖なる鳥で、『岩波仏教辞典』によれば、1. 首が長く、2. 全身が白く、3. くちばしと脚が赤いとある。インドや日本の図像ではガチョウの姿をしているが、ミャンマーのヒンダーはオシドリのような体形だ。一般に、ツクシガモ属の渡り鳥、学名 *Tadorna ferruginea* (*Casarca ferruginea*)、英名 Brahminy Duck もしくは Ruddy shelduck、とされている。首はあまり長くない。

ベンガル湾を隔ててミャンマーの対岸にあたる東インドのオリッサでは、このツクシガモを「パンダハンサ」と呼んでいる。モン族がもたらしたインド文化セットの中に、オリッ

¹ 正確には「ヒンザー」と「ヒンダー」の間の音。英語の Father の [th] に近い。

サ系ハンサ像が入っていた可能性が考えられる。

仏教では、ゴータマブツダが前世で功德を積まれたという本生譚（ほんじょうたん、ジャータカ物語）の中にも、賢いハンサの王（ハンサラージャ、鷺王、雁王、ヒンダーミン）が鳥たちを導く話があり、ミャンマーの漫画本にも出てくる。



分からないのは、ヒンダーとカラウェイの図像的区別だ。カンドーギー湖とチーミンダインの例で見れば、カラウェイの首筋は獅子のたてがみのように段になって落るのに対して、ヒンダーの首筋の羽毛は、尾羽とともに炎形に立ち上がる。

ところが、ヤンゴン市中央部のチャウタッジー寺の涅槃仏の足の裏にある 108 の図像ではこれが逆になっている。さらにややこしいことに、Ruddy Goose と英訳された鳥（ビルマ語名 Sekkawet、足裏図ではペリカン）も加わっている。パーリー語辞典では Cakkavako（英名 Ruddy goose, 学名 *Anas casarca*）と書かれていて、調べれば調べるほどこんがらがってくる。

ちなみに仏足の 108 図像中の席次では、74 番ヒンダー、82 番カラウェイ、85 番セッカウエツの順となる。鳥の眷属で 64 番ガルダは、ヒンドゥー教のビシュヌ神の乗り物である。

仏像が作られるようになったのは、ブツダが亡くなって 500 年余り後のことで、超人的なイメージとして三十二相が編み出された。我が国の仏像でよく知られる、頭のとっぺんの肉けいや螺髪、眉間の白毫などがそれである。手足の指の間には「水かきのような膜」があることになっていて、鷺王ヒンダーミンはその点でブツダになることが約束されていた。またその渡りの性質が、肉体に縛られない精神の象徴ともされ、とくべつ崇められたようである。

とほき世のかりようびんがのわたくし児 田螺^{たにし}はぬるきみづ恋ひにけり

斎藤茂吉の幻想的な歌が短歌界に衝撃を与えたのは、もう 100 年も前のことになる。畦^{あぜ}に近くぬるんだ水の中で、タニシが触覚をゆるゆる動かしている姿に、舞楽「迦陵頻」を連想したのか、それとも子供のころ蔵王の麓の寺で耳にした法話に、なにかそのような不思議な話があったのか。

タニシを肴に、ミャンマービールを飲ませる店はないだろうか。